

「娘に会うまでは死ねない」。そういつも言
い、多くの士官が部下に対し威張り散らして
いた中、兵学校出の士官よりは一段下に見ら
れる特務士官だつたとはいえ、部下に対する
接し方も物腰が柔らかで、思いやりがあつた。
連日の出撃で未帰還機も多く、帰投した大
半の機が銃弾をたくさん受け、帰つてくる中、
怪重すぎると見張りを欠かさず、乱戦の中へ入
ろうとはせずに、その外を飛んで、いつも無
傷で帰つてきたり。
それがこの物語の主人公、宮部久蔵だ。皆
が死んで隣り合わせの中、一生懸命、国に命を
預ける覚悟を持つて戦つている時に、「生き
ア帰りたい、死にたくない」というようない
とを考え、もし言つていたとしたら、白い目
で見られても当然かもしれない。そんな風潮
の中、この生き方がよくでききたなど私は思う。
今とは少し勝手が違うかもしれないが、今
でも、やはり家族はかけがえのない大切なも
のだし、自分がいなくなれば一家の大黒柱を

失い、残された家族はその後、路頭に迷う二
とにもなりかねない。
しかし、そのような概念的な話ではなく、や
はり宮部久蔵は、妻と娘を「愛していだ」の
にして、いたのだとと思う。
彼の教える予備士官が飛行訓練中に事故で
死んだ時、「精神が足りなかつた」という上
官を前にして、予備士官とがばう発言をして、
上官からひどい制裁を受けたのもその証だ。
宮部は一度フリーピンで特攻に志願するか
と問われたとき、「志願しなかつた。特攻は」「
り、「生き残る可能性はゼロだつたからだ。
九死に一生」ではなく、「十死零生」つまり「
死ぬものと守ることができる」として家族を、大
切なものを守ることで家を守ることで、大
に違ひない。
得させて出撃していき、た特攻隊員は多かつた
しかし彼にとつて、「出撃したら生き残る
チャンスはゼロ」なのだ。このよくなものは

作戦でもなんでもなかつた。だから、特攻に行つて死ぬための飛行訓練をする教官として赴任した彼は、有能な、戦争が終われば社会で様々に活躍するはずの教え子たちを、無駄死にさせないために不可を出し続けたのだ。

当時の軍の首脳部が、赤紙一枚で兵士をいくらでも集められると軽く考えていた時代に。そういう彼にとって、最後に過ごした鹿屋の生活は地獄だったはずだ。有為な若者たちの十死零生を見届け、自分が大切にした教え子たちまでも見送る。圧倒的な米軍の物量を前に、満足に敵艦に体当たりさせてやる二とさえできず、途中で撃ち落とされるのをただ見ていることしかできない。

「日本きて家族のもとに帰りたい」と言つていた彼だけに、特攻隊員や残された彼らの家族たちの葛藤・苦しみ・悲しみを痛いほどわかつていたに違いない。

最後の特攻に赴く日、彼は生き残るワジを捨てた。彼の乗るはずだった零戦の発動機が

不調だつたのだ。単に、「生きて家族のもとに帰りたい」だけの、自己中心的な男だつたならば、十に一つでも生き残ることができた。うな可能性がもし目の前に現れたとしたら、わらにもすがろうとするのが、普通の人間だ。

でも彼はそれをしなかった。そして、その可能性を、かつて重傷を負いながらも身を挺して自分を救つてくれた彼の教え子に譲る。

己の生・国の在り方にに対する絶命。自暴自棄になつていたかもしれない。そして、家族に対する思いと、自分の命を身を挺して救つてくれた部下。そのはざまで、宮部は生き残るチャンスを部下に譲つた。

現代は当時とは違ひ、自由な時代だ。何よりも平和の重要性が叫ばれ、人権重視が掲げられる。しかし我々は、宮部久蔵が大切にしたりの人のことを考え、大切にして生きているだろうか。この話の中で武田勝則が語るよう

に、「私たちはマスコミや世界の風潮に飲み込

まれて、本人でさえ「自分が善良な人間だと本気で思い込み、その実、切実な実感を得ないと、ことも多いのではないか。」
 いまま、口先だけの平和や愛を口にしている恥ずかしながら私はまだ恋というものをした二ことがない。そして、「守りたい」と思えるものを持った二ことがない。そう考えた時は、まだ他の人に守られていることに安心して、これまで「守る」ことについて、あまり本気で考えてこなかつただけなのだと気がついた。
 実は「持つたことがない」のではなく、「今はこれまで」「愛するものを守る」ために命を懸けて戦場に赴く必要もなく、「故郷・家族・国」に日本は確かにとても平和で、私たちは幸せだ
 ついて考えなくても安心して生活できる今のうるのではなくて、我々一人一人の生き方をしに依存している。私も宮部久蔵の生き方をしきりと受け止めて、「歩んでいきたいと思う。」